

平成29年度 第1回総合教育会議 議事録

日時：平成29年7月21日（水）14：00～16：00

場所：佐世保市役所4階 第三委員会室

出席者：朝長佐世保市長、西本教育長、久田教育長職務代理者、深町教育委員、
合田教育委員、内海教育委員

事務局：松尾総務部長

池田教育次長、友永センター長、小田副理事、大川内企画部次長、池田総務部次長、中原教育次長兼学校教育課長、吉田総務課長、松尾課長補佐

【議事録】

【吉田総務課長】

皆様こんにちは。

定刻より少し前ですが、ただいまから、平成29年度第1回総合教育会議を開催させていただきます。

皆様におかれましては、大変お忙しい中、ご出席を賜り、まことにありがとうございます。市長に議事進行を行っていただくまでの間、私のほうで進行をさせていただきます。私は教育委員会総務課長の吉田と申します。よろしくお願いたします。

まず、会に先立ちまして、本日お配りしております資料のご確認をお願いいたします。まず、右上に教育1と記載しています第1回総合教育会議資料、さらに小中一貫教育、コミュニティ・スクール関連のリーフレットが3点、それに加えまして本日追加で、学力の説明の際に使用いたします教科に関する学力の全国・長崎県との比較のA4用紙1枚ものを準備させていただいております。皆様でございますでしょうか。

それでは、ここで会の主催であります朝長市長様よりご挨拶をいただきたいと思えます。

【朝長市長】

皆さんこんにちは。

本日は委員の皆様方には大変お忙しい中にお集まりいただきまして、まことにありがとうございました。また、常日ごろから本市の教育行政につきましてご尽力賜っておりますことに対しまして、厚く御礼を申し上げる次第でございます。

ます。

本日は、平成29年度第1回目の総合教育会議ということでお集まりいただきました。教育委員の皆様と私の考え方を調和させ、有効に活用する会だと思っておりますので、何とぞよろしくお願いを申し上げる次第でございます。

6月議会が先般終わったわけでございますが、6月議会におきましても、9名の議員の方がご登壇をされまして、教育行政につきましてそれぞれのお立場からお話をされておりました。やはり、教育につきましては、それぞれ議員の皆さん方も関心の高いところでございますし、幅広くいろいろな課題、いろいろな提案をし、いろいろな指摘をされるところでございます。教育には正解がない、百家争鳴ということが昔からよく言われるわけですけれども、しかし、その中で共通点を見つけ出し、そして合意形成をしていくことが大事なのではないかと思っております。

それぞれ課題もたくさんあるわけでございますが、去年は広田中学校・小学校の小中一貫ということで、委員の皆様方には大変ご尽力いただきました。おかげさまで4月1日から無事スタートをしたと聞いておるわけでございますが、この間のご努力に対しまして心から敬意を表する次第でございます。

今後も新たな取り組みということで、今日の課題にもなっておりますが、小中一貫教育、あるいは義務教育学校、あるいはコミュニティ・スクール等の課題も出てくるのではないかと考えておりますし、また、学力向上対策も佐世保にとっての大きなことの一つじゃないかと考えております。他と比較して云々というわけじゃございませんが、学力が高いにこしたことはないと思っておりますので、そういう意味では、私どももいたしましてもしっかりと対応していかなければいけないと思っております。

さらには、今日のもう一つの議題でございますが、文化振興政策と社会教育政策ということで、これは市長部局、そして教育委員会との兼ね合いもこれまで大きな課題になっております。その辺をどう整理するかが重要なことだと思っておりますので、ぜひ、今日はそういうところに視点を合わせながら意見交換をさせていただければ大変ありがたいと思います。何とぞよろしくお願い申し上げます。

簡単ではございますがご挨拶にかえさせていただきます。どうもありがとうございました。

【吉田総務課長】

ありがとうございました。

それでは、ここから議事に入らせていただきます。ここからは主催者である朝長市長の進行でお願いいたします。

【朝長市長】

それでは、これからは私の進行で会を進めてまいりたいと思います。

本日のテーマとしては、教育委員会が進める重点プロジェクトの進捗と、文化振興政策、社会教育政策の2点を準備いたしております。平成29年度も4カ月を迎えようとしております。教育委員会が進めている重点プロジェクトについて、本年こういった取り組みをされているのか、また現時点での進捗について伺いたいと思います。

まずは教育委員会の取り組みを資料に基づきご紹介いただき、その後、意見交換という流れで進めてまいりたいと思いますが、それでよろしゅうございますか。

【朝長市長】

それでは、教育委員会からの説明をお願いしたいと思います。

【西本教育長】

教育長の西本でございます。私のほうから概要を説明申し上げたいと思います。

ご案内のとおり、平成29年度におきましては、教育委員会が特に取り組みを進めてまいりたい重要なプロジェクトを三つ掲げてございます。

一つ目は、今日のレジュメの教育1の表題にもありますように、「英語で交わるまちSASEBOプロジェクト」でございます。これにつきましては、3月に市長にもご出席いただく中で、市民文化ホールのほうで第1回目のキックオフミーティングを実施しまして、さらに今月の1日に2度目を開催いたしました。だんだん具体的な内容が見えてまいりましたので、その中身についてご説明を申し上げたいと思います。

次に、小中一貫型小・中学校、コミュニティ・スクールの形、それから義務教育学校の現状でございます。これにつきましては、今、市長のほうからもご説明がありましたように、4月から広田小学校の6年生が中学校に移転しまして、早速ですけれどもああいう形で始まっております。それから、金比良小学校と光海中学校、小佐々地区の1中学校と2小学校につきましても、それぞれ新しい形で取り組みが始まっております。そういう意味で、現在の進捗状況をご説明させていただくとともに、今回6月の議会で条例を通していただきましたけれども、来年の4月から黒島小・中学校と浅子小・中学校が義務教育学校ということでスタートを切る準備に入っておりますので、これについてもご説明させていただきます。

最後に、学力向上対策についてでございます。市長の話にもございましたけれども、今の佐世保市の学力の現状を見据えながら、将来的にこういった形で子供たちの学力が向上していくか、早速ですけれども29年度から取り組みが始まりました。それについてもご説明させていただきたいと思います。

それでは、それぞれのテーマにつきまして、各課長のほうから詳しくご説明させていただきたいと思っております。よろしくお願いたします。

【小田社会教育課長】

社会教育課長です。

それでは、三つプロジェクトがある中の一番初めの「英語で交わるまちSASEBOプロジェクト」、資料を1枚めくっていただいて資料1と右上についている分、これ以降を使わせていただきたいと思います。

この事業につきましては、佐世保の地方創生の取り組みを牽引しますリーディングプロジェクトの一つとしまして推進しているものでございます。学校教育において、英語を教える教職員のスキルアップを狙いました教育センター事業、それから学校教育において子供たちへ新たな教育メニューを展開する国際理解・交流能力育成事業、そして学校教育と社会教育の連携により子供たちにグローバル社会を生き抜く素地を身につけさせる学社融合推進事業——地域未来塾、そして、先ほど教育長からもありました英語シャワー事業、この四つの事業で構成されております。

28年度に着手して、29年度から予算化しましたこの4事業につきまして、それぞれ具体的に取り組みを進めているところでございますけれども、本日はその中でも教育長が冒頭に申しあげました英語シャワーについて進捗がございますので、ご報告させていただきたいと思っております。

2ページ目をお開きください。この事業のスタートは教育長からアナウンスいただきましたように、まず、キックオフ推進フォーラムを3月25日に実施いたしております。元ミスユニバース日本代表エリアナ氏を講師に招いて、市長もパネルディスカッションに参加をいただきましたけれども、この推進フォーラムを皮切りに、官民協働の取り組みとして、市民に参画を呼びかけて、そしてたくさんの方々に集まっていただきました。

その後、英語シャワーでどんなことをしたい、こんなことをシャワーとして浴びたいという思いを持ち、実際に今年度から事業づくりに参加いただける市民の方々に集まっていただきましたが、第1回目となる5月13日、第2回目となる7月1日ともに、70名の方々に集まりをいただきました。特に、第2回目の70名の中には、いわゆる英語圏出身の方々にも多数参加いただきました。この2回のミーティングはワークショップ形式で進められ、第1回目はやりたいこと、受けたいことを話し合い、この後、5ページのほうでお示し、説明いたしますが、17ものメニューが抽出されました。そして2回目となります7月1日には、この17メニューの事業優先度を話し合い、今年度を実現可能なものから着手することを話し合いました。

そのスケジュール感とプロセスをあらわしましたのが2ページの図でござい

ます。まず今年度10月ぐらいまでかけてミーティングに集われた方々と実施チームや事業プログラムを構築し、今年中にテストモデル事業を展開し、その実動者をキーマンとしながら今後の取り組みを協議し、展開する協議組織を設立することを目指しております。

次のページをお開きください。その実動主体となる協議組織と行政のかかわり方でございます。従来、行政がこういう新規の事業を、いわゆる官民協働でやろうとする場合には、実施主体のほうへ丸投げする形が多々見られたところでございますが、今回のプロジェクトでは、行政も実施主体の一員として参画し、行政としての役割を担うように構築しております。

次のページをお開きください。4ページでございます。このようなプロセス、スケジュール感で進めていくために、第2回目となります7月のミーティングでは、5月に話し合いました、やりたいこと、受けたいシャワーを図のようにA、B、Cの三つに分類し、例えばAランクのように比較的短期間、時間をかけずに実現できるものから実際のテストモデルケースとして取り組み、成功体験を積み重ねていく中で熟度を増していこうことで協議を進めてまいりました。その協議結果が次のページの一覧でございます。

5ページをお開きください。5月13日の第1回ミーティングのワークショップで、70名の市民の皆さんが英語シャワーで今後具現化したいとまとめられたのがこの17メニューです。7月1日の第2回ミーティングでは、この17項目に対して、先ほどA、B、Cランク——短期間でできること、ちょっと時間が必要なもの、時間をかけないと難しいものというA、B、Cランクを話し合っつけていただいたわけでございますけれども、この表の右側のほうにその結果をあらわしております。17項目に対し、A、B、Cのランクをつけたところ、Aランクとされたものが八つございました。これについて、このミーティングに集まった方々に個別にチームをつくっていただき、事業化に向けてさらに話し合いを始めていただきました。

八つの検討チームができたわけでございますが、このチーム分けは機械的に人数を平均化してつくったわけではなくて、どのチームに入りたいという希望を聞いた中でやっていただきましたので、グループによっては10人を超える大きいグループもあれば、6人ぐらいの小ぢんまりしたグループもございます。

実際に八つのチームでそれぞれ実現に向けた協議に着手していただいたところでございますが、例えばスポーツ対抗戦というのが10番目でございます。こちらは当初の意見では、ニミッツパークのグラウンドで日常的に日米対抗のサッカーや野球のイベントができたらいいなというご意見で出てきた事業ですけれども、実際に企画を動かしてみると、もうちょっと気軽にできるスポレク祭みたいなことができないかというふうにイメージが少しずつ変わっていった

り変化しておりますが、とにもかくにも前に進んでいます。

八つのチーム全てが事業実現までこぎつける、行きつけるかというのは、チーム次第でございますけれども、現段階で具体的に検討チームとして機能し始めているものは、網かけした4チーム、「S a s e b o E x p oチーム」「塾の先生と教職員のお茶会チーム」「W e bサイトやS N Sの開拓」「スポーツ対抗戦」は、実際にこれをやろうということで、いわゆる自主ミーティングを繰り広げるよう計画されております。行政がこのチームミーティングにそれぞれ入りながら、今年度の具現化、事業化を目指したいと考えております。

また、現段階では、本年度実現できることを最優先して、ミーティング、チームを進めておりますけれども、先ほど申し上げました、1年、2年かけてもやっていきたいBランク、Cランクの事業もございますので、これにつきましても同時並行的に全体ミーティングを別途開いて話し合いの場を設けていきたいと思っております。

なお、この取り組みにつきましては、米海軍佐世保基地の司令もお聞き及びで、協力をする旨のお声をいただきまして、先日、教育長に直接司令官にお会いいただいて、広報、それからコミュニティ部門のほうにそれぞれこの取り組みに協力するようという指示を出していただきました。

英語シャワー事業は、まだ事業やイベントといった形ある構築はできていませんけれども、学校教育部門を含めた四つの取り組みそれぞれが進む中、英語で交わるまちS A S E B Oプロジェクトの推進のために今後も取り組んでまいりたいと考えております。

以上、状況報告を終わります。

【中原学校教育課長】

学校教育課長です。資料の6ページをお開きください。資料2、小中一貫型小・中学校、コミュニティ・スクール、義務教育学校の現状についてご説明いたします。

初めに小中一貫型小・中学校の現状についてご説明いたします。

広田小学校と広田中学校並びに金比良小学校と光海中学校におきましては、本年4月から、いずれも小学6年生が中学校敷地内で学んでおります。両校とも表に記載しているとおり、中学校教員による乗り入れ授業が積極的に行われております。

主な取り組みといたしまして、広田小学校の6年生は、クラブ活動は小学校へ戻って実施をするとともに、中学生と一緒に生徒会活動や部活動、サマーチャレンジと称する学習会、駅伝・マラソン大会、合唱コンクールへ参加または参加予定でございます。中学校の活動を一部体験させ、小中一貫校の特徴を生かした教育活動の充実が図られております。

また、金比良小学校の6年生は、中学校の部活動やサマースクールと称する学習会、文化発表会、人権集会等へ参加、または参加予定でございます。あわせて、小学校、中学校全体の活動も記載のとおり実施または実施予定でございます。こちらも小中一貫校の特徴を生かした教育活動の充実が図られているところでございます。

次に、コミュニティ・スクールの現状についてご説明いたします。

小佐々小学校、楠栖小学校、小佐々中学校におきましては、本年4月からコミュニティ・スクールとあわせて小中一貫型小・中学校を導入いたしております。少し距離は離れておりますが、表に記載のとおり小学6年生、5年生に対し中学校教員による乗り入れ授業が積極的に行われております。

主な取り組みといたしましては、3校合同で「かがやきっ子会議」と称する児童生徒の代表会、ボランティア清掃、PTAスポーツ大会、教職員連絡会、小学校の運動会や卒業式への中学生の参加、地域人材や自然を生かした授業を実施または実施予定でございます。小佐々3校におきましても、コミュニティ・スクールとあわせ、小中一貫校の特徴を生かし、地域と連携した教育活動の充実が図られているところでございます。

最後に、義務教育学校の現状についてご説明いたします。

6月議会で条例改正のご承認をいただき、黒島小中学校並びに浅子小中学校において、来年4月から義務教育学校を導入する準備を進めているところでございます。両校とも小中併設校である特徴を生かし、表に記載しているとおりに中学校教員による乗り入れ授業が日常的に行われております。

主な取り組みといたしましては、両校とも着任式や始業式などの学校行事、学力調査や各種集会などを小中合同で実施しております。表の一番下に記載しておりますが、黒島小中学校におきましてはシーカヤック体験を、浅子小中学校におきましては、新聞を教材として活用した授業を特色ある活動として実施しております。両校とも、これまで実践してきたことをベースとしつつ、義務教育学校として小中一貫した教育のさらなる充実を目指して研究を進めているところでございます。

なお、お手元に広田小中学校、金比良小・光海中学校、小佐々3校のリーフレットをお渡ししております。それぞれの取り組み状況が記載されておりますので、参考にさせていただければと思います。

以上で資料2についての説明を終わります。

次に、資料3についてご説明をいたします。初めに、追加でお配りいたしました1枚ものの資料をごらんください。

昨年度の全国学力・学習状況調査の結果でございます。上段が小学校、下段が中学校をあらわしております。ごらんのとおり、左の佐世保市を一番右の全

国と比べますと、小学校では国語Aと算数Aは全国平均と同じでございますが、国語B、算数Bについては全国平均を1ポイント下回っております。下段の中学校では全国平均を2ポイントから4ポイント下回るという厳しい現状でございます。学力向上は喫緊の課題であると捉えております。

課題を解消するための学力向上推進計画についてご説明いたします。先ほどの資料の7ページをごらんください。

1の目的にありますように、児童生徒の学力・学習状況の向上を図るため、2にあります主に学校の管理・指導を行う学校教育課と、主に研修を行う教育センターが主管、連携をし、3にあります教職員と児童生徒を対象に、4にあります四つの方針のもと、学力向上を推進してまいります。

組織といたしましては、5の(1)にあります教育長を本部長とした学力向上本部と、それから8ページの(2)にあります学力向上推進委員会の組織を機能させ、小中学校の校長先生や授業を担当している先生方の協力を得ながら事業の推進を図ってまいります。

具体的な取り組みについてご説明いたします。9ページをごらんください。

6の(1)に挙げております学力向上本部は、施策を企画・推進する中核を担います。(2)の学力向上推進委員会の中の①の学力向上関係機関会議でございますが、学校教育課、教育センター、小中学校校長会の代表者による会議でございます。施策運営の助言を行う機能がございます。

②の学力向上授業モデルの構築につきましては、今年度から学校教育課に配置をしていただきました4名の学力向上専任指導員を学校に派遣し、四角で囲んでおりますが、アからオの五つの土台を全ての小中学校に示し、市内全部が同じ方向を向いた取り組みを進めているところでございます。その下のア、前期に記載しておりますが、現在、学力向上専任指導員が、五つの土台を具現化した授業を提案するため、全ての学校を回っております。イにありますように、後期は前期の提案授業を受け、各学校の代表者による授業を実施し、学力向上専任指導員が全ての学校を回って指導・助言を行う予定でございます。

③の「授業改善研修」における実践協力員制度は、ア、イに記載している教科におきまして、ミドルリーダーと若手教員と一緒に授業を通した研究を進め、若手教員の授業力を向上させるとともに、教員を育てる立場のミドルリーダーの資質、能力の向上も図ってまいります。

④の検証問題の基礎研究・作成・実施は、学力の検証軸として全国で実施をされております全国学力・学習状況調査に対応した児童生徒の能力を向上させる一手段としてテスト問題を作成・実施することができないか、研究を進めるものでございます。これらの具体的な取り組みを機能させながら、本市の児童生徒の学力向上を推進してまいります。

以上で資料3の説明を終わります。

【西本教育長】

以上で、①のプロジェクトの推進状況について説明を終わらせていただきます。

【朝長市長】

ありがとうございました。教育委員会が取り組んでおられる各プロジェクトについて、現時点での進捗状況等をご説明いただきました。各プロジェクトの事業展開については、定例教育委員会などの折に触れ、教育委員の皆様と事務局が協議・調整しながら進められていると思います。各委員さんもそれぞれのお立場からの思いや考えているものがあらわれるのではないかと思いますので、ご意見をお聞かせいただければと思います。

まず、内海委員、いかがでしょうか。

【内海教育委員】

英語が話せるまち SASEBO ということでスタートして、まず感じるのは、英語シャワー事業は、私は順調にスタートできたのではないかと考えています。残念ながら私はこの3月25日に行けなかったんですけども、このパンフレットから、企画については民間がつくったんじゃないかと思われるぐらいおもしろい企画をつくっていただきました。ただし、どの程度、佐世保市民がこのことを知っているかとなると、私はごく一部の方じゃないかと思っています。私は、小中学校にフォーカスして、こんなことをやったらどうだろうかという企画を考えましたので、そのお話をさせていただきたいと思います。

まず、自分の体験なんですけれど、自分がどうして英語、それから海外に興味を持ったかいうと、小さいときに私の父がよく映画に連れていってくれました。その当時、小学校、中学校時代は佐世保にたくさんの映画館がありまして、毎週のごとくアメリカの映画、ヨーロッパの映画を見ていて、何か言葉を感じていた。ラジオをつけるとアメリカの音楽が鳴っている。まず、その環境が一つ。それと決定的だったのは、高校3年のときに沖縄の米軍基地でホームステイを体験いたしました。そのときは1泊だったんですけど、家庭に入って、英語が通じないショックと同時に、もし通じたらもっと親しく会話ができるなということを感じました。

その自分の体験を通して私は思っていることがあります。小中学校の現場を見ました。英語の先生方はとてもいい授業をされていると私は思います。視聴覚を使って非常に子どもたちを引きつけて、おもしろいなど。私も、5分か10分しか見られないんですけど、最後まで授業を体験したいなと思うぐらい、英語の先生の指導力というのはすごく高いなと私は思います。

ただ、英語の先生はそうかもしれないけれど、英語の先生以外の先生が英語

にどこまで関心があるんだろうか、佐世保が「英語が話せるまちづくり」をやることにどれだけ理解を示されているのんだろうかと思うと、逆に仕掛けをしていかないといけないんじゃないか。いっそのこと、今日一日は学校の中で英語しかしゃべっちゃいけないよとか、数学の授業も国語も授業も英語でやろうよとかですね。「無理だ」って言われそうな気がするんですけど、とにかく何かを小学校と中学校でやる。今の小学生、中学生は英語に対するモチベーションは絶対にすごく高いと私は思います。ただ、授業だけではどうにもならない、何かもっとそこに仕掛けが必要じゃないかと思いました。

学校の現場がどういう状況かわからないけれど、「exciting one day English, everybody」というように、エキサイティングに小中学校を巻き込んでいく。だから、小中の彼らの英語に対する学び、それから、なぜ英語を勉強するのか。そのために、英語を勉強して世界で活躍している人は佐世保の中にもいらっしゃるし、そういう人を呼んできて小中学校の子供たちにわかりやすい英語の授業、グローバルな授業をやっていく。それも、ひょっとしたら子供たちの何かの引き金になるんじゃないかなと思いました。

その中で、この資料を見ながら、「これ、やれるんじゃない」というのが5ページです。先ほど話しましたように、私が1泊だったけれど体験して、その後、今度はアメリカに1カ月間のホームステイをしました。プチ留学制度というのがあるんですが、沖縄の基地の中にプチ留学制度というのがあるので、その人たちと手を組んで、長崎から、もしくは福岡からのツアーを企画したことがあります。結局、実現しなかったんですけど、結構、横浜、東京、大阪から沖縄に来て、3泊、4泊するうち1泊か2泊を米軍の基地の家庭の中で体験をする。そういう企画をやっているというのを聞いたときに、最初は沖縄でいいなと思っていたのですが、よく考えれば佐世保もあるんじゃないかと。佐世保の米軍の方に協力をお願いして、できれば中学生、小学生ではちょっときつかなと思うので中学生をチームで巻き込んで、1泊でもいいので体験してもらおう。通じないんですよ。通じないけど何かわくわくしながら話をして、おいしい料理を食べながらもっと勉強しようという動機づけができるんじゃないかということを感じました。

それ以外に企画があるんですけど、その企画は、今、プロジェクトごとに動いていると聞きました。それも進めながら、なおかつ小学校、中学校での何かビッグなプロジェクトをやっていくと、小中学校、あとは高校生は高校生の別のプログラムで佐世保全体を盛り上げていくとおもしろいことができるし、それをできればマスコミにプレゼンテーションをして全国ネットで放送してもらおう。そうすると佐世保の人は勉強せざるを得ない環境に追い込まれるんじゃないかということ、頭をフル回転させて、今、考えておりました。

以上でございます。

【朝長市長】

ありがとうございました。「英語で交わるSASEBOプロジェクト」ということでございますけれども、これについて何かほかの方からご意見がございませうが。

【久田教育委員】

今、内海委員さんがおっしゃったとおりで、中学校で学校訪問したときに、英語の授業のときにそばで内海委員さんの動きを見ていると、もごもごと話されているんですね。すごいなあと思って見ていました。

佐世保には米軍基地があって、その中に家庭があって、プチ留学はBになっていますけれど、時間をかけて企画して協力していただければすばらしい取り組みになると、今の内海委員さんのご発言を聞きながら感じました。

【合田教育委員】

私も内海委員さんの話をお伺いして、佐世保の基地でのプチ留学をぜひ地元でしたいですね。子どもに経験させたいと思います。

オールイングリッシュの授業のお話を今されましたが、ちょうどうちの息子が高校2年生で、先週、県北地区のいろいろな高校生で学習交流会があったんです。佐世保市内ではあるんですが、うちの息子の行っている高校ではない高校の先生が120分オールイングリッシュで、全て、生徒たちも英語しかだめって。課題も全てオールイングリッシュの指示で、「楽しかった」って言って帰ってきました。やっぱりそういう体験ですね。

このプロジェクトも、今年度になっていよいよ動き出したなという実感が私たちにもあります。残念ながらうちの子は都合がつかずに1回も参加できていないのですが、図書館が実施している「英語de夕活」もすばらしいですね。息子の友達が毎回参加しているのですが、行くたびに「楽しい、楽しい」って。この単語を覚えた、この慣用句が言えたって、すごく喜びを見出しているという話を聞きます。先日、中学生の弁論大会の少年の主張でも、この「図書館の英語de夕活に参加したことで、英語の可能性が広がってきた」って熱弁を振るった生徒がいました。保護者の収入の格差が問題になっておりますが、無料で誰でもあんなに英語のシャワーを浴びられる、これは学力の向上にもつながるとてもいい取り組みだと思います。これからさらに期待しております。

以上です。

【深町教育委員】

私もきっかけだと思っんです。英語を好きになるのも、英語を勉強したいと思っのもきっかけだと思っので、ほんとうに先日の青少年の主張で、「私は英語に興味なかつた。でも、友達に誘われて英語de夕活に参加したことがきつ

けで、もっと英語を知りたい、もっとしゃべりたいという気持ちになった」というのは、ほんとうに印象的でしたし、大事なことだと思います。

あるグループというか、小学生が四ヶ町に出て外国人に話しかけて、それで答えるというイベントがあって、あれはすごくいいと思うんですね。小学生だから臆せず行って質問できる。答えるほうも小学生だから、意外と敬遠せずに素直に答えてくださる。ああいう体験をたくさんの小学生がしたら、英語って意外と気軽に外国人とも接してできるんだという、その体験というのが貴重だなと思いますし、そういう機会を多く、それこそオールイングリッシュじゃないですけど、このときは英語でしか質問しちゃだめよというような、実際にまちに出て体験するという活動は非常に有効だと感じます。

【西本教育長】

私からもひとつ。聞いていると学問としての英語じゃやっぱりだめなんだなと。勉強しなさいじゃ英語はちょっととっつきにくいんですけど、内海先生の体験の話、皆さん方も、ほんとうは外国人とすれ違うんだけれども、「話しかけてきてほしくなかね」って思いながら通り過ぎる。その中で話さないといけない環境に置かれると、意外と自分が習ってきた英語が使えるとか、相手も同じ人なんだなっていう、そういう文化のやりとりが感じられるのは非常に大事だと思いますので、プチ留学制度の実現も学校教育の分野でどういうふうに取り入れられるか検討してみたいと思います。

それから、学校の授業も、さっき言った例えば英語で数学、算数をやるというのは、少数点とか英語でどう言うのか、非常に興味がありますので、実験的なものとして、どなたか先生にやっていただくとおもしろいかと思います。

ありがとうございました。

【朝長市長】

ありがとうございました。

それでは、次に小中一貫型小・中学校、コミュニティ・スクール、それから義務教育学校の現状、それと学力向上対策を中心に意見をいただきたいと思いますが、これは久田委員、お願いします。

【久田教育長職務代理者】

この話題は、これまでも何度となくこの総合教育会議でも取り上げてきて、私自身も小中連携であるとか小中一貫教育というのは大変関心を持って向き合ってきたところです。

特に、今年度スタートした小中一貫教育、先ほど事務局からも具体的に説明がございましたが、特に広田中学校の敷地に校舎を建ててということで、これは保護者の方や地域の方、あるいは議会でも随分と取り上げられて、私どもも重要課題として何度となく話を詰めて、やっと今年の4月からスタートしたも

のですから、非常に心配した部分もございました。

それで、可能な限り私自身は広田小中学校に学校訪問しました。4月にまず施設を見ようということで。これはすばらしい施設を用意していただいたなという思いでございました。

それから、6年生が実際に広田小学校を離れる出発式というのが催されたときの体育館での様子を見て、今度は広田中学校にそのままそっくり対面式というのがございました。それから、広田小学校の運動会を見に行きました。4年生と5年生のリーダー性がほんとうに大丈夫かということが一つ話題になっていましたが、1,000人を超える運動会を、4年生、5年生の係でほんとうに取り仕切っているんですね。6年生はお客さんとして参加をしていたのですが、1,000人を超える運動会を運営していたことに驚きました。

次に、広田小学校の学校訪問に行きました。学校訪問の授業もほんとうに落ちついて。そして今度は広田中学校の6年生を見に行ったときの整然としたすばらしい授業は、ほんとうに感動すら覚えました。

それから、先週、広田中学校を学校訪問し、そこでの校長先生の学校経営の説明にほんとうに感服したといいますか、これまでの保護者や地域の方々への説明、小学校と中学校の校長先生がほんとうに一体となって説明してこられたからうまくいったんだと思います。ある地域の方が、「ところで中学校はどう思っているんだ」と、みんなの前で質問があったそうです。そうしたら、中学校の校長が「私たちはわくわくしています」と。私も教員の経験がありますが、わくわくしていますというところまで言えるのかなど。これには恐れ入って、それを皮切りにということじゃないんでしょうけれど、どんと地域の理解が深まって、今もほんとうに協力的に物事が進んでいる。

だから、これまで、もちろんいろいろな方のご努力はあったにしろ、両校長先生が力を合わせて教職員をまとめ、保護者や地域の方への理解を求め、そして立ち上がっていったんだと思います。

特に、6年生の、いわゆる靴箱ですね。下足棚に、中学生もそうですけれど、真っ白な靴がきちんと並んで、それに合わせるかのように、小学生は色とりどりの靴を履いていますけれど、整然と並んでいる。やっぱり見て自分たちが学んでいるということですね。そして職員室は中学校の中に小学校の先生も職員室がある。そこでいろいろなやりとりができています。中学校の先生は、先ほど説明があったように乗り入れ授業ができています。情報交換ができる。広田中の1年生にとっては、自分たちが小学校で習った先生が同じ敷地内に、同じ校舎内にいる。これなら中1ギャップなんて起こりませんし、安心して生活することができる。

それから、中学校の校長先生の机の横に小学校の校長先生の机がちゃんと置

いてある。そして、頻繁に、ほぼ毎日というように自転車に乗ってお見えになるということで、すばらしいと思いました。

「案ずるより産むがやすし」ということわざがありますが、今の状況が見られてほんとうに安堵しています。校長先生の説明会での力というのが何よりだったかと思いますが、一方、こうやって踏み出して、県内外でもこんな取り組みをしているところは珍しいと思うんです。そうすると、飛躍してこれがモデル校的なことにつながっていくことが実感できましたので、私は事あるごと学校訪問すると、広田小中に学んでください、金比良、光海に学んでください、もちろん安定した取り組みをしている小佐々3校に学んでくださいと。

そして、来年度から義務教育学校になるであろう黒島小中も、浅子小中も心して移行準備に取りかかっています。市長さんもお時間があつたら、広田中学校の小学6年生の様子あたりをもうちょっとでもいいのでごらんになると安心なさるかなと。今、そういう状況ですので、一応感想になりましたが、県下でも佐世保が初めていろいろな取り組みをしていますので、いいことなのかなと、いい影響が及んでいくのかなというようなことを感じております。

学力のことも何度となく話しました。昨年度の総合教育会議でも話題としましたけれども、今年度から、先ほど事務局から説明があつた専任指導員の4名の配置、私自身はどうなるのだろうかとか、定例会でも話が詰まってきたけど心配な向きがございました。

専任指導の先生に、「どがんことばしよつとね」ってお尋ねしました。4月早々はなかなか動きが取れなかったんでしょう。小学校が46校ですか、中学校が26ですよ。そのほとんど、8月までちょっとかかるそうですが、1回ずつは回っておられる。それぞれの学校のスケジュールの合間を縫って、よく全部の学校を回ることができたなど。この努力にまず敬服します。

じゃあどんなことをなさっているのかというと、学校に行つて80分か100分ぐらいの時間を使つて、そのうちの30分を専任指導員の先生が教職員に対して模擬授業をされるそうです。その模擬授業というのも、こうしたら失敗するよという悪い模擬授業と、こうしたらうまくいくよというよい模擬授業、学校がどちらを求めるかで決まるんでしょうけれども、そうすると、仮にこうすると悪いよという授業をしたときに、それを見ている先生たちは「あら、自分の授業と一緒にたい」と、あるいは、よい授業の場合は、これも「自分の授業と一緒にたい」、あるいは「あんな授業をしてみたい」という刺激がある。それと専任指導員として指導するということになるので、中堅以上の教職員というのは長年自分のパターンで授業をしてきていますから、若干アレルギーで効果が薄らぐんですけれども、そのところをともに課題を共有しようという取り組みをされていますから、今のところ順調にいつている。

私もやっぱり気になるものですから、ある小学校の校長に「どがんね」って聞いてみました。そうすると、授業そのものはそれぞれがそれぞれにやっているんだけど、同じ方向を向かせるためのいい材料になる。「やっぱりああいうのはだめよね」というのが、その模擬授業を材料としながら話せる。だからこの4人の活躍っていうのは、じわじわと浸透していくのかなと思っています。

もう一つは、私どもが今年度学校訪問をし始めて、この事業と重ねてみたときに、校長先生たちの学校経営の説明に一定の変化があらわれている。つまり、学力の状況の説明はあるんです。これまではその年度の学力状況の報告だけだったんですが、今年度は経年を見て、この学年はこういう課題があって、前はよかったんだけど落ちたとか、前は厳しかったんだけど上がってきたとか、それは何でだろうというようなことを分析されているし、その学年の状況を学年担当と詰めながら話をされています。もう一つは模擬授業を見ることによって、通常どこの学校でもやっている研究授業とか校内研修とか初任者研修がやりやすくなった、活性化してきたということをおっしゃっています。

ただ、学校教育課長から話がありましたように、中学校に入ってから課題として、どうしても成績が落ち込む。これは私自身もどうしてだろうかと。ほかの教育委員さんもよく発言なさるのですが、小学校を出るときと中学校に入るときをつなぎの部分に甘さがある。卒業させると小学校は卒業させたってなるし、中学校は来るまで待っている。この2週間のだらんとした期間、そこでぶつんと切れるのではないか。あるいは学年にしてもそうですね、小学校の4年から5年に上がるとき、5年から6年に上がる、その休みの間を充実させる意識づけとか、そういうものも特に小中の連携が新しい切り口としてさらにできるのではないか。

私たち4人も、実は学力向上本部の一員なわけです。意識しておかないと、私たちが置いていかれるなど。今度の総合教育会議までに間に合うかどうかわかりませんが、どうぞ市長さん安心してください、佐世保の学力は大丈夫ですよとなるまでもう少し時間がかかりそうですので。しばらく待っていただければと思います。

以上で。

【朝長市長】

ありがとうございました。熱弁を振るっていただきました。この学力向上と小中一貫型等について、ご意見があらわれましたらお願いいたします。

【深町教育委員】

私は現役保護者ではないんですけれども、親として学力向上というのは一番の課題だと思います。私も教育委員になって学校訪問をさせていただいて、学力が、県や国の平均を上回っている学校はほんと一握り、何校かしかなかった

ん。佐世保市の学力向上はほんとうに喫緊の問題だなと感じております。私は学力向上は学校だけの力ではなし得ない、特に小学校では家庭の力が大きく影響していると感じます。

毎回ですけれど、学校訪問をした際に学力調査の結果を示していただくのですけれども、ある学校は示していただいた学力検査の結果が4年生がほかの学年に比べて特に悪かったんです。私は、たまたまその学校を6月の公開授業のときに参観していたんです。そうしたら、ほかの学年は公開授業を保護者の方がたくさん見に来られていて、教室の後ろはいっぱい、廊下にまであふれているような状況だったんですけれど、その4年生は教室の後ろにぽつぽつと、2クラスあったんですけれど、数えるほどしかいらっしやらなかったんです。なんでこんなに少ないんだろうと思って。それでも先生方はすごくいい授業をされていたんですよね。こんなにいい授業をされているのに何でこんなに参観者が少ないんだろうかと思いつつ、帰り際、校長先生に「4年生はすごく参観の保護者が少なかったんですけど」ってお尋ねしたら、校長先生が「そうなんですよ。私もその学年が一番気になっています。その学年は保護者の協力も少ないし、関心も少ない。どうしたらいいんだろうかということで、ちょっと気になっています」ということを話されたんですよね。その後の学校訪問での学力調査の結果を聞いたのと、その参観者が少ないのを照らし合わせて考えると、やっぱり学力は家庭学習の定着とか生活習慣、早寝、早起き、朝ごはんなどの生活習慣と大きくかかわっている。私はそれをほんとうにひしひしと感じました。家庭がしっかりして、家庭学習が定着して、生活習慣もきちんとしていると、それが学力のアップにつながってくると私は強く感じた次第です。最近の出来事でした。

【朝長市長】

ありがとうございました。

【合田教育委員】

では、現役保護者として。今、私は祇園中学校に娘が通ってしまして、保護者に授業参観と懇談会、学校に行こう大作戦を展開中です。

私たち教育委員の研修の場で、いつも県教委の方が、教職員は全ての子供の学力に責任とこだわりを持つべきだということを繰り返しておっしゃいます。今回の佐世保市の取り組みは、これが佐世保市の全教職員の方々に隅々まで周知徹底できるすばらしい取り組みだと、保護者としてもものすごく期待しています。久田委員がおっしゃったように単発的なものにならないように、これからしっかりと、何度も評価と考察を重ねて、これがずっとつながっていくように私たちも頑張っていきたいと思っています。

今、深町委員のご意見を受けて、ほんとうに学校教育だけでは学力向上とい

うのは無理だなと保護者自身が感じています。実は、5月に教育委員の研修会があったんですけれども、私はいつも家庭教育部会とか社会教育部会に参加していましたが、今年は久田委員にお願いして始めて学力向上の討議をする学校教育部会に参加いたしました。

そのときに、他市町の教育委員さんからのお話がありました。県のこども未来部が推進している「ながさきファミリープログラム」という、保護者同士で問題について話し合っ、それを達成する過程はどうしたらいいか自分たちで話し合っ、答えを見つけていくというプログラムを活用した市町が幾つかありまして、少しずつですけれども学力向上につながっているという発表でした。それを受けて、私もちょうど養成講座の募集があったので、そのファシリテーターの資格を取ったんですが、これから佐世保市内のPTA 連合会とか、それぞれの学校のPTA と連携を取りながら、保護者の学力向上の意識を高めるような啓発活動に私としても取り組んでいきたいと考えております。

ちょっと耳が痛くなる話かもしれませんが、学力向上についてはハード面の充実も大切だと思います。ちょうど今週の月曜日に全国紙の教育欄でこんなふうに大きく取り上げられていたのですが、近年の猛暑の影響で冷房の設置がかなり進んでいて、今、全国の公立小中学校の41%だそうなんです。一番低いのは九州ですね。九州の中で一番低いのがこれまた長崎県です。長崎県はワースト10の中に入っているんですよ。東北を含めてです。

佐世保市では扇風機を設置しましたが、特別教室には扇風機がございません。先ほどの英語とかも今は視聴覚教室だとか特別教室で実施していますし、授業参観のときに室温をはかっていると、扇風機が2台フル回転している中でも、7月、9月は33度とかあるんですよ。

文科省は子供が集中して勉強できる環境は10度以上30度以下ときっちりと言われています。子供が学習に集中できるような環境づくりも行政としてももう少し、忍耐は必要だという昔ながらの考えとは別に、どうやったら学力向上につながるのかをハード面でも真摯に考えなければいけないと、最近の猛暑でちょっとばてぎみの私の意見でした。

以上です。

【内海教育委員】

広田の話ですけれども、私は広田に住んでいて子供が広田小学校、広田中学校に行きました。父兄の立場で、今回の6年生を中学校に持っていくという話、両方の立場で今回体験させていただいたんですけれども、私がまず感心したのは、裏方で教育委員のいろいろな部署の方、それから小学校、中学校の校長先生をはじめ、一つのビックプロジェクトにチャレンジされたと思っています。相当なエネルギーを使って、時間、それから議会もそうですし、文教厚生委員会と

の意見交換とか、これだけのエネルギーを使う。それに対していろいろ言いたいことをずっと耐えて現場の皆さん方が仕事をされているのを見て、ほんとうに頭が下がりました。

最後にこの言葉が全てだと思ったのが、広田中学校の山口校長が「わくわくして待っています」です。この言葉はしびれました。現場の先生方の情熱を私自身勉強させてもらって、今後、東部地区では私は声を大にして佐世保市の教育委員会は最高だとPRしていきたいと思っております。

以上でございます。

【朝長市長】

ありがとうございました。

【西本教育長】

まず、小中一貫、コミュニティ・スクール、義務教育学校ですけれども、広田中学校は今年の市政懇談会から非常に厳しい意見をいただいております、私自身不安でいっぱいでした。私以上に、現場の校長先生、先生方は不安だったと思います。ほんとうにそのときに今の両校長先生、先生方でほんとうによかったなど。見事な乗り切り方だったと思います。不安を払拭してくださいました。

運動会に行きましたら、非常に不安を感じておられた保護者の一人が私のところに駆け寄ってこられて、「ありがとうございました」と深々とおっしゃいました。これで大丈夫だなどと思いました。

小学校6年生と中学校の生徒にアンケートを取られていまして、どんなアンケートかなと思って見たら、中学生は「教室がきれいでうらやましい」とか「できれば教室を変わってほしい」とかなんです。ところが6年生は「自分たちは不安だった」ということだったんですが、「中学生はよくしてくれる」と。そういう交流が行われているのであるならば、年長者の中学生の姿を見ながら6年生が頑張れる。中1ギャップというものがおそらく解消していくだろうという現場を目の当たりにしました。

それから、お礼を言わなくてはいけないことがあります。市長にも校舎ができたときに見に行ってください、ここには網を張ったほうがいいのか、ここの屋根は飛び降りたくなるような校舎やねとか、いろいろご指摘いただいたおかげで、全部措置をすることができました。そのようにみんなで支え合ってこの広田小・中学校は、今、動きつつあって、多分いい結果が出ると思いますし、県内各地から視察が増えるのではないかと考えております。

あと、金比良、光海も隣接の学校の強みがあって、乗り入れ授業も積極的にやられていますから、ここも学力向上につながる一つのモデル校になると思います。

コミュニティ・スクールは、学校どうしが離れているんですけども、それぞれの校長先生のリーダーシップのもとに父兄の方が非常に熱心に取り組んでおられます。来週、私も学校に行きますので、また直に話を聞いてみたいと思います。

黒島小中学校、浅子小中学校の義務教育学校です。、黒島小中学校は、この間、学校訪問のときに施設を見せていただきました。すばらしい学校ができつつありますので、あとは人間を減らさないように、島留学の話も出ていますので、そういった意味ですばらしい施設を有効活用しながら次につなげたいと思います。

学力向上です。それぞれお話いただきました。たかが数字ですけどされど数字で、せめて全国平均まで上げないといけないなと昨年思いまして、すぐこのプロジェクトに取りかかったんですが、中学校に行っ、わからない、授業についていけないということが不登校の原因の一つで、全てとは言いませんけれど、非常に大きな原因の一つになっているんじゃないかなと思っています。成績のいい子はそれなりに、下の子をどんどん上げていく、底上げを図っていかないといけません。

生き抜く力というのは、これからの世界は自分で考えて、自分で生き抜いていかないといけない時代で、基礎学力がついていないと、高校卒業して社会に出たときに、もうちょっと勉強しておけばよかったとおそらく後悔をすると思うんです。そういう意味では、今、ほんとうに真剣に取り組んでやっていただいていますので、学校、教育委員会、校長先生、現場の先生が全部同じベクトルを向くようにやっています。そういう意味では、久田委員がおっしゃったように、少しずつ、一步一步、牛の一步ですけど、確実に上がるんじゃないかと私自身は期待をいたしております。

以上でございます。

【朝長市長】

ありがとうございました。それでは、私のほうからコメントをさせていただきますと思います。

まず、英語で交わるSASEBOプロジェクトにつきましては、内海委員からお話がありました。やっぱり、引き金というかきっかけづくり、動機づけというのが非常に大事なことだと思います。しゃべれ、しゃべれって言ったってなかなか英語ではしゃべれないので、自分でそういう体験をしながら、そこで感じて英語に興味を持つ雰囲気をつくらないといけないんじゃないかと思います。

そういう意味で、いろいろな機会をつくるために、今、17プロジェクト出ているようでございますけれど、そういうものをできることからやっていくと

ことが非常に大事なことではないかと感じました。ぜひ、積極的に推進をするようにしていただきたいと思いますし、また、これもどこかで持続性というか、持続性ということを見ると、支援策も考えないといけないと思うし、ただ「やれやれ」と言っただけで教材がないとか、そんなことだと具合が悪いと思いますので、そういう面での配慮も考えなければいけないと思っております。

それから、図書館の「英語d e 夕活」は非常に好評だということですが、これは図書館長が自発的に始めたわけで、それぞれ月ごとに少しずつやり方を変えながらやっておられるようです。こういうのも図書館だけではなくて、次は美術館でやるとか、どこかのスポーツクラブでやるとか、そんなことも考えられるかもしれません。動機づけをするためには、図書館だけではなくて、ほかのところでもきっかけづくりが必要かなと感じます。

もう一つ、今回のプロジェクトには出てきていないんですけど、放課後児童クラブの活用というか、そこへ講師の派遣等することも、これは70人のメンバーの中からは出てきていないのかもしれませんが、そういうことも提案をしながら、児童クラブでやりたいところをモデルにしてやってみてもいいかなという感じがします。

英語に関しましてはいろいろな試みをしながら、試行錯誤を繰り返しながらやっていくことが大事だと思っておりますので、ぜひ積極的に展開してもらいたいと思います。

それから、小中一貫、義務教育、コミュニティ・スクールに関しましてそれぞれご意見いただきました。広田小・中学校でのご苦勞に関しましては、それぞれの皆さん方に実際にご尽力をいただいた賜物だと思っております。うまくいき始めているということなので私もほっとしておりますが、久田委員から途中経過も見なさいというお話がございましたので、行ってみたいと思います。非常に雰囲気よくスタートできたということ、それぞれの皆さんのご努力の賜物じゃないかと思っております。

義務教育学校、コミュニティ・スクールにつきましては、義務教育学校はこれからということになるわけでしょうけれど、コミュニティ・スクールは「海光町学園」という形で、私も小佐々小に行ったときにその話を聞きまして、非常に皆さんが熱心に取り組んでいらっしゃる。地域の皆さんたちが取り組んでいらっしゃると思いますので、これも一つのモデルケースで、地域が一体となることが大事なことかと思っております。

合併前は、それぞれの町単位でいろいろな取り組みができていたんですよ。それが大きくなって、小佐々町全体での取り組みがないとか、あるいは江迎町だけでの取り組みがないということがあって、きめ細かさがなくなりつつあったと思いますが、こういうものでカバーできるようになってきています。そう

いう試みは大事なことではないかと思っておりますので、ぜひ合併地区だけではなく、それぞれの中学校区の中でやってほしいと思っております。

それから学力向上に関しましては、それぞれ心配をされているということですが、心配をするということが非常に大事なことではないかと思っております。これをほったらかしたら同じことを繰り返すことになってしまいますけれど、教育長が昨年から対策を始められたということで、専任指導員を4名配置されたということは非常に効果的なことではないかと思っております。

久田委員のほうから特に取り組みの仕方等についてお話がございましたが、なるほどなということ、やはり先生方に対する指導ですから、こうやれよ、ここが悪いよと言ったってなかなかそれは受け入れが難しいでしょうけど、いい例、悪い例の授業をしながらそれを感じさせることは大事で、いい取り組みをされているなどと思っております。ぜひ、これを繰り返すことによりまして、おそらくいい形ができてくるのではないかと思っておりますので、ぜひ進めていただきたいと思っております。

それから、深町委員、合田委員からもお話がございましたが、家庭教育のあり方、これも大事だと思います。そうしたときに、今の「ながさきファミリープログラム」について、私は詳しいことはよくわかりませんが、保護者への啓発をやらないといけないと思っております。保護者の中でも積極的な人はおそらくやってらっしゃると思うんですけど、なかなか参加されない方たちをどうするかというのが一番の課題だと思います。これも繰り返しながら、何回も何回もPTA等が働きかけをして、こういうプログラムもあるということでみんなを参加させて、保護者の皆さんたちにそういう認識を与えていくことが大事だと思います。

時が過ぎて、これを中学校になってから教育しようと思ったってなかなか難しいので、小学校のときに親御さんたちにそういう意識づけをしておくことが必要だと思います。小学校1、2年の保護者の人たちに鍛えるような、鍛えるというのはおかしいんですけど、啓発をするようなことをそれぞれPTA等にも働きかけながらやっていくことができればいいのではないかと感じました。

それと、これは私の意見ということではないんですけど、学力向上について、今回の新聞報道の中で、佐世保市の2学期制のあり方について、2学期制と3学期制はどうなんだということを聞かれたことがあります。それについては、「相関関係、因果関係はわかりません」としか言えなかったわけです。その辺、先ほど区切りということを言われましたけれど、そういうものがもしあるとすれば、その辺を研究する必要がある感じがします。何もしないということではなくて、3学期制が2学期制になってから十数年たっているの、一度検証をすることも必要な感じがして、これは課題として捉えていただければ

と思います。そういう市民の意見があるということで、私も学力向上をそういう観点で見ている人もいるんだということを感じました。それが原因だとも思わないんですけど、一つの要因ではあるかもしれませんが、課題として考えていただければいいのではないかと思います。

それでは、次の文化振興政策と社会教育政策ということで、時間が大分少なくなってきたので、これに入っていきたいと思います。これにつきましては、まず現状について説明いただきたいと思います。

【西本教育長】

それでは、現状について課長から説明させます。

【小田社会教育課長】

社会教育課長です。それでは、文化振興政策と社会教育政策につきましては、企画部と教育委員会の両部局がかかわっていて、本日は企画部次長も同席しておりますけれども、社会教育課のほうから全体説明、進捗と状況説明をさせていただきます。

この件に関しましては、本市が文化政策に関して市長部局と教育委員会の2部局で推進している中で、冒頭市長も課題とおっしゃいましたが、資料4の10ページをお開きいただければと思います。こちらの一番上に示しております三つほどの課題を両部局で認識しておりますので、その状況を報告します。

課題と申しますのが、上に①から③までありますけれども、①としてこの政策に対する責任の所在が明確でない。二つ目として、所管課が市民の方々にわかりにくい。③として施設を複数持ったりしている中で、効率性に欠けるところがある。いずれもここには断言的に書いていますけれども、そうではないかと推察しているところです。

冒頭申し上げましたように、本市は文化政策、事業を市長部局の具体的には企画部文化振興課、そして教育委員会では社会教育課の2部局で所掌しております。真ん中の表にお示しましたように、佐世保市総合計画に掲げる大きな柱「文化芸術に親しめる環境づくり」を2課で推進しているところでございます。2課は総合計画の基本目標「あふれる魅力を創造し体感できるまち」を実現するために、この政策「文化芸術に親しめる環境づくり」の具現化として、市長部局では佐世保市文化振興基本計画、教育委員会では佐世保市教育振興基本計画を策定しまして、それぞれが互いの計画を意識し、関連づけながら課題整理、方向性の確認、事業具現化を行っているところでございます。

その具現化のために、施策、事務事業等を細分化しましたものが真ん中の施策体系表でございますけれども、左側のほうに、ごらんのように4施策、文化の振興、文化を創造する人材育成、文化財、包括的施策を定めまして、これを

推進するために13の事務事業、そして大まかな事業内容は、右側になりますけれども、両課で38項目がございます。

基本的には社会教育課と文化振興課の2課が役割分担を確認しながら連携して行っているところがございます。施設としましては、アルカスSASEBO、市民文化ホール、島瀬美術センター等、市民サービスを提供する施設をそれぞれが所管していて、ごらんの網かけの部分のように、目的や対象、事業内容が重複しているものが複数存在することが認識できました。

その内容をまとめましたのが下の表でございます。おおむね六つの業務について社会教育課と文化振興課がそれぞれ類似の事業展開を行っていることが分析できました。これらの類似事業の重複は両課それぞれが認識して、例えば、市民から民間の事業の後援依頼が行われたときには、お問い合わせに対しましてワンストップサービスに努めるなど、現在お互いに連携しながら行っているところではあります。やはり団体からはわかりにくいというご意見をいただくこともございます。

この文化政策の法的な整備につきましては、文化政策のうち文化財保護政策につきましては、文化財保護法にて明確に教育委員会が行うものと定めてありますが、それ以外につきましては地方自治法、地教行法、文化芸術振興基本法において、市長部局が行わなければいけないのか、教育委員会が行わなければならないか、そういう明確な定めがございませんで、全国各自治体での取り組みはまちまちでございます。

以上、企画部と教育委員会の両部局で文化施策の推進に関して現状と課題を分析し、報告いたしますので、この状況についてご意見、ご議論をいただければ幸いです。状況報告を終わります。

【朝長市長】

ありがとうございます。市長部局で所管する文化振興施策と教育委員会でも所管する社会教育施策にはそれぞれの違い、特徴がありながら、同時にさまざまな課題があるということが、今、指摘をされたようでございます。それぞれ、委員の皆さんのご意見をお伺いしたいと思います。

【久田教育長職務代理者】

実は、私は過去において、させぼ夢大学の事務局長を5年ほどやっております。事務局長時代に毎年、きっちり後援をいただくために佐世保市と佐世保市教育委員会の後援をいただきに参ります。そうすると、後援の申請をするとき、佐世保市の後援をいただくには文化振興課に、そして佐世保市教育委員会の後援を申請するときには社会教育課に、二つの書類をつくって2カ所に出向かないといけないという現実がございました。これが、市民の方が何か文化事業をして、佐世保市や教育委員会の後援をいただくときに、果たしてこういう

仕組みをご存じなのか。

教育委員会に来たら、佐世保市の後援をもらうには文化振興課ですよ、文化振興課に行くと、「教育委員会の後援をもらうには上に行ってください」というようなことで、再度足を運ばなければいけなくて、一つ書類で済めばいいのになど。大体そういうお願いに初めてお出でになる方というのは不安な気持ちでお越しになるのに、行ったら行ったでそういうことになると、窓口としては非常にわかりづらいのではないかと。私はたまたま、過去に学校教育課に勤務していた経験があったから、そういう後援の名義申請が分かれているということはわかったんですけど、そういうことからすると、窓口のわかりづらさに対して、一定何か工夫をして解消していただきたいというのが率直な私の意見でございます。

もう一点。今、一生懸命、小田副理事から説明いただいたものの、これを見ても同じような事業が絡み合って、「はい、わかりました」というようにはならない。大切なことが多岐にわたって文化事業施策が展開されていることについては、それぞれ38項目も事業があるということですから、大変ご苦労なさっていて、今の佐世保市の状態があるんだろうとは思いますが、例えば、社会教育課と文化振興課で38項目がされていて、じゃあ評価をするときに、どういうベクトルに向いて、評価がされて、その評価がまとまってどう生かされているのか、ちょっとわかりづらいところがあります。法令で定められている、先ほど説明があった文化財の保護関係あたりはしようがないとして、「責任の所在」と課題の中にも書いてありますけれども、もう少し事業等についてそんなところを今後整理されたほうが市民に見えやすい文化事業になるのかなという感想を持ちました。

以上です。

【朝長市長】

ほかにございませんか、深町委員。

【深町教育委員】

ずっと教育委員会で所管されていまして児童文化館の児童管弦楽団が、数年前に市長部局の管轄であるアルカス財団に移管されましたけれども、あれはほんとうに成功例ではないかと思えます。財団の音楽への造詣や培われた音楽家とのネットワークとの深さによって、よりレベルの高い指導環境が整えられて、オーケストラとしてほんとうにすばらしい成長を遂げていると思えます。年に1回定期演奏会などが開催されますけれども、その集客力に驚きました。会場の1、2階もいっぱいですよ。最初定期演奏会をするときに、どのぐらい入るんだろうって非常に心配しました。私はアルカス評議員もしているので心配したんですけども、心配はどこに行ったのだろうというぐらいたくさん

観客が入っていらして、すごい集客力ですし、団員を募集してもすごく集まってくるというところであらわれていると思います。これは、佐世保市の音楽文化の振興の目的のために力を適切な方向に集中したということによる成果ではないかと思います。

私は、先ほども言いましたようにアルカスSASEBOの評議員をさせていただいていますけれども、委員会の中でそのジュニアオーケストラについて、熊本県立劇場の館長をされている姜尚中さんがすごく興味を示されて、すばらしいジュニアオーケストラだ、何とか熊本でもそういうことができないかということをおっしゃっていたという報告を聞きました。また、県北で一番大きな文化施設であるアルカスが佐世保にあって、それを運営している財団に市の文化政策をより活性化させるための役割を担ってほしいと思っています。中核市になって、市長さんが進められている連携中枢都市圏の構想においても、文化の面でのアルカスや財団が、この地域において果たす役割は非常に大きくなっていると感じています。

10年ぐらい前でしたか、アルカスSASEBOができて間もないころだったんですけれども、私はある放送局が主催されるコンサートのお手伝いをしたことがあります。長崎からみえた方が話している中で、「佐世保市は文化水準が低いから」と言われたときに私はカチンときまして、ほんとうにそのときはグサツときたんですけれども、アルカスができて15年ぐらいになりまして、さっき久田委員のお話の中に出てきました夢大学ですよ。2,000人に対して3,000人近くの応募があることと、毎月開催される夢大学のほとんどに、ほぼ2,000人に近い観客が入っているのを見たときに、私は佐世保市の文化水準が低いなんて絶対言わせない、それを長崎の人にも知ってほしいと思いました。それぐらいアルカスは県北の文化施設の拠点ですし、また、市内や県北地域に音楽家を派遣するなどの活動を今以上に活発に行っていただきたいと思っています。

現在、アルカスでは小学生を対象に音楽への興味や関心を促すことを目的に、少人数での授業形態で密にコミュニケーションを取りながら、生の演奏を小学生に聞かせる、音楽の魅力を届ける「音楽アウトリーチ事業」というのが行われているんですけれども、毎回それがとても好評だと聞いています。何とか小学生のころから音楽の造詣を深めてレベルを上げて、決して文化水準が低いと言われない佐世保市になってほしいと思います。

【久田教育委員】

深町委員さんの今の発言を応援するわけではないんですが、私の友人が長崎にいるので、時々、長崎と佐世保の比較で話を聞くように私は努めているんです。「どがね、佐世保は」と聞くと、「佐世保はよかね」と言うんですよ。長崎

にもブリックホールあって、佐世保にはアルカスがあります。佐世保のアルカスではほとんどが主催事業の宣伝をしているわけですが、ブリックホールは主催者が別にいて、お客を集めるための宣伝をしている。つまりは、文化の水準は間違いなく佐世保のほうが高いということを申し上げたかったわけです。

【朝長市長】

合田教育委員、どうぞ。

【合田教育委員】

文化水準が低い佐世保ということで、私自身は、子どもを産んで育てながら、佐世保市民全体が文化に対する認識が低いのではないかと冷めた目でずっと見てきた一人です。事あるごとにそういう発言をしてきたし、今、深町委員さんがおっしゃったように、子どものうちから本物に触れさせないと、それを大人になっても見ようとは思わないし、芸術に触れていれば、その背景にあることを知りたくて勉強も、特に歴史とかですね、すると思うんですよ。そういう意味では、文化ってすごく大切だと思っていますが、市民の文化芸術に長く活用されてきた佐世保市民会館が今年3月閉館になりました。市内の文化ホールはアルカスと文化ホール、この2館になったわけですがけれども、利用日の予約の時期がこの2館で違ったりとか、備品をお互いに融通ができなかったりするんで、そこら辺がうまく統一されれば、市民はもっと活用しやすくなるし、施設運営自体の効率化も図れるのではないかと市民として思っています。

先ほど、小田課長のほうからも説明がありましたが、佐世保美術振興会という団体が行う市民展には社会教育課が深くかかわっていて、あと佐世保文化協会さんが行う市民芸術祭、佐世保文学賞、これには文化振興課が深くかかわっているとお聞きしております。それぞれの団体にそれぞれのアーティストがたくさん所属されているんですね。なので、この二つの団体がもっと緊密に交流できれば、今以上に多様な文化を取り入れながら、それを醸し出すような土壌ができるのではないかなと思います。

今月の5日に、株式会社野村総合研究所が作成した成長可能性都市ランキングに佐世保市がトップテン入りしたことが非常に話題になっています。その中でも私がうれしく思ったのは、視点が6視点あってそのうちの一つ、多様性を受け入れる風土という視点で3位でした。これは文化がいろいろな多様な文化を取り入れてますます発展していく、そこを評価された3位ではないかと思えますので、行政が変わることで、そして行政の体系が一本化することで、文化水準が低いと言われないような、さらに高い文化水準になるのではないかと期待しております。

以上です。

【朝長市長】

ありがとうございました。

【内海教育委員】

先ほどブリックホールとアルカスの話が出ていましたけれど、ブリックホールでのユーミンのコンサートに行ってきました。私が最後に一つだけ乗れないことがあったんですね。とにかくアンコールアンコールなんです。長崎でアンコールのときにどう言うと思いますか。「もってこーい、もってこーい」って言うんですよ。「何だ、もってこいって。佐世保人は言えんぞ」と思いながら、もちろん拍手だけはしましたけれども。

私は、文化芸術に親しめる環境づくりについては、佐世保市民の目線からいけばそうなると思うんです。二つ、佐世保市民の目線と、佐世保市外、要するによそから見て、佐世保に魅力を感じて、ただ単にコンサートというよりも、佐世保の文化と接点を持つような、そういう呼び込みができないだろうか。

実は、黒島に私行ってまいりました。教育委員のB訪問で私は行けなかったので、テレビ東京の「厳選いい旅」の企画で全国の旅行会社から自分のふるさとをPRする企画を出してくださいというのがあって、どうせだめだろうと思いながら、実は黒島をアピールするツアーを企画して東京に投げました。そうすると、二次面接に来てほしいと連絡がありました。

スタッフに聞いたら暇なのは社長しかいないということで、私自身まず黒島に行ってきました。行って、佐世保に黒島っていう一つの観光地があることに、私自身、驚きと同時にすごく喜びを感じました。絶対、黒島のプレゼンテーションを思い切りやろうということで東京に行きました。しかし、黒島だけではないんです。じゃあ佐世保市がどうなのかというと、佐世保市の中にハウステンボス以外の観光地、観光地というよりも文化施設、そういうものがどれだけあるかというので、たまたま教育委員でいろいろな視察をさせていただいているので、これを見せたいよねというのが何か所かあって、その企画をつけて実は東京のほうにまた投げました。

最終的にテレビの取材が来るかどうかは別として、私自身、佐世保というふるさとについて改めて考えさせられました。今までは、佐世保のお客さんをどうやって外に連れていくかという企画だったんですけど、そうではなくて佐世保には呼び込めるだけのものが絶対ある。ただ、それをプレゼンテーションしないといけない。黙って「いいよ」とだけ思ってもだめです。

プラスアルファ文化という切り口で、例えば佐世保に旅行のこと、文化のこと、遺跡のこと、いろいろ聞こうと思って問い合わせをします。それは私は観光コンベンションではないと思うんです。佐世保市に問い合わせをしたら、そこにチーム佐世保というのがあって、そこは実は部署は分かれているかもしれないけれど、お客さんのニーズを酌んで、担当部署とつなぐコーディネーター

みたいなものがあるって、そこに行ったら音楽であったり芸術であったり観光であったりというものに振られる。窓口は一つです。そういう組織がくれたらなど。

佐世保にはこれだけの人材がいっぱいいるので、絶対できると思うんです。ただ、縦割は絶対にノーで、これは民間のサービスマインドを持って佐世保を全面的にアピールしようよというのを発信するとおもしろい。要するに観光人口を増やすことにつながるし、できれば定住型につなげたい。昨日、実は唐津に行ってきました。唐津にはものすごい陶芸家が集まっているんですね。唐津人ではないけれど、そこに住んで、唐津焼をつくって、そこで生計を立てている。そこにお客さんをお呼び込んでいて、佐世保も、そういう文化発信がもっとうまくいくと、人が住みついてくれるところまでトータルで考えていけるのではないかと、そのためにもチーム佐世保というのが絶対必要ではないかなということを感じました。

【朝長市長】

ありがとうございました。

【西本教育長】

ありがとうございました。まず、教育委員会事務局から一つ問題提起をさせていただいたんですけれども、それぞれ委員からご意見をいただきました。確かに、文化という大きな捉え方をして、それを市役所の中で進めていくということで、一番難しいのは市民の皆さんの目線からどう見えているのかというのが大事だと思います。

久田委員から窓口のお話がありましたし、工夫をしてほしいと。それから資料を見ても、どの課がどういうふうに動いているのかがわかりづらいと。教育委員会も文化振興課もそれぞれ一生懸命やっているのですが、やっぱりそこら辺がわかりづらいところはあると思います。それをしっかりしないといけないかな、まとめる作業も必要なかなと思いました。

それから、責任の所在というのは、失敗したときの責任の取り方という意味ではなくて、方向性を一つにすると。教育委員会はこっち向いて文化をやっている、企画部はこっち向いてやっているとしようとするというようならば、力はそがれてしまいます。1足す1を3ぐらいにするために方向性を一つにするという意味での責任が必要だと思います。

それから、ジュニアオーケストラの話もありましたけれども、今、長崎と比較する必要もないぐらい遜色のない、十分に育ってきていると思います。「もってこい」の話もありましたけれども、佐世保の人はニュートラルに受け入れるので、一定の偏った文化だけを大事にするのではなくて、いろいろな地域がある中で、多様なものを受け入れるという合田委員の話もありましたし、そういう

意味では、ある一つのことをいろいろ考えて、このベクトルを決めていったほうがいいと思います。

そういう意味では、今いただいた意見等々を参考にしながら、縦割ではない横断的なつながりができないか、検討に入ってみたいと思います。

【朝長市長】

ありがとうございました。今、西本教育長がまとめてくれたような感じがしますので、繰り返しになるかもしれませんが。

市民の目線から見たときには教育委員会も佐世保市も一つなんですよね。一つだとしか思っていないのに二つ窓口があるというのはわかりにくい。そして、施設の管理も、こっちは教育委員会で、こっちは市長部局だということもわかりにくいわけです。ですから、ここは一本化していくことを考えるときに来ているのではないかと思います。これは機構改革等も伴ってまいりますし、政策の振り分けということも当然出てくるのではないかと思いますので、これは早速検討に入る必要があるのではないかなと思っています。今日は総務部長も来ておまして、十分話を聞いてくれたと思いますので、ぜひ、教育委員会と市長部局のほうとすり合わせをやりながら、しっかり役割分担していくことが必要ではないかなと。それによって市民の皆さん方のわかりやすさ、そして効率のよさ、あるいは責任の所在という話も出てまいりましたけれど、そういうものもクリアになるのではないかと思います。

私は佐世保の文化水準は決して低くないと思っていますので、ぜひこれをさらに高めていければと思います。音楽などに関しては非常にレベルが高いものがあると思いますけれど、まだまだ頑張らなければいけないところも当然あると思いますので、そういうところも含めて総合的にレベルアップを図っていく。あるいは観光との関係など、多くの皆さんに見ただけの材料がたくさんあるのではないかなと思っていますので、そういうことを踏まえながら、窓口をしっかりとわかりやすくしていくことができればと思います。

以上、私からのコメントでございますけれど、今日、これまでのご意見全体について、ちょっとこの辺をもう一回おさらいしたいということがございましたら、それぞれの委員さんからお話しいただければと思います。

いいですか。それでは、時間は少し残っておりますけれど、大体意見も交換できたようでございますので、第1回目の総合教育会議を終了したいと思います。長時間お疲れさまでございました。

----- 了 -----